

伝統芸能文化創生プロジェクト

2020年度事業報告書

伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス(TARO)



— 発行 —

伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス

〒604-8156 京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町 546-2 京都芸術センター内

TEL 075-255-9600

FAX 075-213-1004

e-mail taro@kac.or.jp

URL <http://www.traditional-arts.org>

— 発行日 —

令和3年3月31日

伝統芸能文化を

未来へ

Traditional Arts
Archive
&
Research
Office

伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス(TARO)

目次

1. 伝統芸能文化創生プロジェクトについて	p.1
2. 伝統芸能文化とは	p.2
3. 実施事業	
実施事業一覧	p.3
a. ネットワーク構築	p.4
— ネットワーク先リスト	
b. 伝統芸能文化の現代に適応した形での活性化	p.5 ~13
— 伝統芸能文化復元・活性化共同プログラム	
c. 伝統芸能文化の創生のためのシンポジウム&公演	p.14 ~16
d. 市民向け講座	p.17
— YouTube 能楽講座「高砂の思い出」(全10回)	
e. 新型コロナウイルス感染症の影響下における伝統芸能の状況調査	p.18 ~21
— アンケート	
— ヒアリング	
f. 相談窓口	p.22 ~23
g. 受託・協力・連携事業	p.24
○【協力事業】	
— 京都市自治記念式典 オープニングセレモニー	
○ 新型コロナウイルス感染症の影響により中止になった事業	
— 地域の小中学校との連携プログラム	
【企画制作】中学生の能楽大連吟～未来～ ほか	
h. ウェブサイト	p.25
i. 伝統芸能文化創生プロジェクト推進会議委員より	p.26 ~29

■「伝統芸能文化創生プロジェクト」と「伝統芸能文化センター」構想

「伝統芸能文化センター」は、2011年に京都市が策定した「国立京都伝統芸能文化センター(仮称)基本構想」(素案)に示されている“伝統芸能文化の継承・創造の拠点施設”です。センターが備えるべき機能として以下の6つが掲げられています。

- 1 伝統芸能に関する学術研究
- 2 伝統芸能に関する創造・普及
- 3 楽器・用具用品に関する相談・支援
- 4 ネットワーク・コーディネート
- 5 全国発信・地域間交流
- 6 海外発信・国際交流

この6つの機能の実現のため、先行的に実施した2007～2013年度の「京都創生座」や2009～2016年度の「五感で感じる和の文化事業」では、流派を越えて伝統芸能の持つ力を引き出す創作・公演や、国内外への発信・交流、一般市民への普及等に取り組んできました。その成果を引き継ぎ、2017年度からは「伝統芸能文化創生プロジェクト」として、上記の6つの機能を更に強化するための活動を行っています。この「伝統芸能文化創生プロジェクト」を推進する主体となるのが、京都市と京都芸術センターから成る伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス(TARO)です。

■ 伝統芸能アーカイブ & リサーチオフィス

(Traditional Arts Archive&Research Office 略称:TARO)

TAROは、「伝統芸能文化センター」に必要とされる機能の確保・強化に取り組む事務局として2017年度に京都芸術センター内に設置されました。伝統芸能の継承や保存、用具・用品とその材料の確保、普及・創造・発信活動など、伝統芸能文化の総合的な活性化の観点から、ネットワークの構築や基礎調査等を進めています。

■「伝統芸能文化センター」構想の経緯

2003年度	京都創生懇談会より「国家戦略としての京都創生の提言」提出
2004年度	「歴史都市・京都創生策」策定
2006年度	京都創生研究会「国立京都伝統芸能文化センター(仮称)」分科会を設置。2008年度まで検討(全9回開催) 「歴史都市・京都創生策II」策定→国へ要望 「京都文化芸術都市創生計画」策定→「国立京都伝統芸能文化センター(仮称)の整備」が重点課題に
2007年度	「京都創生座」事業の実施(～2013年度)
2009年度	「五感で感じる和の文化事業」の実施(～2016年度)
2011年度	「国立京都伝統芸能文化センター(仮称)基本構想(素案)」策定→国へ要望(以降、毎年度要望) 「京都文化芸術都市創生計画 改訂版」策定→重要施策群1:継承と創造に関する人材の育成等に位置付け
2013年度	「創生劇場」の実施(～現在)
2014年度	「京都文化芸術プログラム2020」策定→プログラムを牽引する重要事業に位置付け
2016年度	「第2期 京都文化芸術都市創生計画」策定→8つの最重要施策のうちの1つに位置付け
2017年度	「伝統芸能文化創生プロジェクト」の実施 「伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス」を京都芸術センター内に設置

2 伝統芸能文化とは

TARO が対象とする伝統芸能文化は、古典芸能（落語、漫談、義太夫、奇術などの演芸も含む）や民俗芸能（広義の儀礼・祭礼・年中行事等を含む）、これらに不可欠な材料・道具の製作に係る伝統工芸技術に至るまで、極めて多岐にわたります。

伝統芸能文化創生プロジェクトでは、以上のように「伝統芸能」に係る多くの分野を総合した概念として「伝統芸能文化」という名称を用いています。

歴史を通じて形成されてきた精神性、美的感性、文化的価値が総合的に凝縮されている伝統芸能文化は、言語や文学の伝統と同様に失ってはならないかけがえのないものです。

	古典芸能	民俗芸能
伝承者と鑑賞者	専門の実演家によって、目の肥えた観客を相手に演じられてきた。	芸能専門ではない伝承者によって、信仰行事の一環として、神仏に奉納するために演じられてきた。
内容	日本で近世以前に創始され、現在も実演されている芸能。能・狂言・歌舞伎・文楽・日本舞踊・邦楽・落語・講談など。	五穀豊穡・長寿・悪疫退散などを神に祈って行われる民間の信仰行事に伴い、各地域社会で伝承されてきた芸能。郷土芸能。
上記に係る伝統工芸技術や楽器・用具用品、材料等		
古典芸能、民俗芸能に用いられる楽器・用具用品、またそれらを作るために必要な材料や伝統工芸技術。		



3 実施事業

■ 実施事業一覧

a ネットワーク構築

— ネットワーク先リスト

b 伝統芸能文化の現代に適応した形での活性化

— 伝統芸能文化復元・活性化共同プログラム

c 伝統芸能文化の創生のためのシンポジウム&公演

d 市民向け講座

— YouTube 能楽講座「高砂の思い出」(全10回)

e 新型コロナウイルス感染症の影響下における伝統芸能の状況調査

— アンケート
— ヒアリング

f 相談窓口

g 受託・協力・連携事業

【協力事業】
— 京都市自治記念式典 オープニングセレモニー
— 新型コロナウイルス感染症の影響により中止になった事業
— 地域の小中学校との連携プログラム
【企画制作】中学生の能楽大連吟～未来～ ほか
— 【受託事業】教文伝統芸能シリーズ「能楽なう」ほか

h ウェブサイト

i 伝統芸能文化創生プロジェクト推進会議委員より

a ネットワーク構築

— ネットワーク先リスト

TARO は、伝統芸能文化の保存・継承・普及・アーカイブ等に取り組む下記の機関・施設等とネットワークを作り、情報共有と連携を図っています。

- アサノ楽器
- 一般財団法人伝統的工芸品産業振興協会
- 今井三絃店
- 鹿児島市文化振興課
- かごしま文化情報センター
- 加勢鳥保存会
- 株式会社篠笛文化研究社
- 株式会社鳥羽屋
- 株式会社宮本卯之助商店
- 上鳥羽橋上鉦講中
- 木之本町邦楽原系製造保存会
- 岐阜県産業技術センター繊維・紙業部
- 九州の神楽ネットワーク協議会
- 京都市産業観光局クリエイティブ産業振興室伝統産業担当
- 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課
- 京都市歴史資料館
- 京都市立御所南小学校
- 京都伝統産業ミュージアム(公益財団法人京都伝統産業交流センター)
- 公益財団法人鼓童文化財団
- 公益財団法人札幌市芸術文化財団
- 公益財団法人日本伝統文化振興財団
- 公益財団法人ポーラ伝統文化振興財団
- 公益財団法人未来工学研究所
- 公立大学法人京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター
- 大学共同利用機関人間文化研究機構
- 国際日本文化研究センター（日文研）
- 国立能楽堂（独立行政法人日本芸術文化振興会）
- 古典芸能よせびっ
- ゴッタン成音会
- 鹿角工芸 ハタリ源角堂
- 茂山千五郎家
- 曾於市立財部北小学校
- 田中製紙工業株式会社
- 田中村六斎念仏保存会
- 地方独立行政法人京都市産業技術研究所
- 伝統芸能の道具ラボ
- 東京鹿踊
- 独立行政法人国立文化財機構アジア太平洋無形文化遺産研究センター
- 独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所無形文化遺産部
- 十津川村総務課企画グループ
- 十津川盆踊り実行委員会
- 奈良県地域振興部文化財保存課
- 能楽大連吟実行委員会
- ひつつん保存会
- 福居一大会館鳥ごったん部
- 福知山伝統文化を守る会
——NPO 法人丹波漆、福知山藍同好会（由良川藍）、
丹後二俣紙保存会（丹後和紙）
- フリースタイルな僧侶たち
- 文化庁地域文化創生本部
- 文化庁文化財第一課
- 邦楽ジャーナル
- 三股町企画商工課
- 宮崎県オールみやざき営業課

ほか（50音順）

b 伝統芸能文化の現代に適応した形での活性化

— 伝統芸能文化復元・活性化共同プログラム

伝統芸能文化（古典芸能、民俗芸能、又はそれらに係る楽器・用具用品、材料や伝統工芸技術等）において支援を必要とするプログラムを公募し、内容を審査したうえで、伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィスとの共同プログラムとして実施しました。

「伝統芸能文化復元・活性化共同プログラム」は助成金ではありません。提出された申請書を基に計画から運営まで申請者と TARO が共同で行うという全国でも他に類を見ないものです。申請者（団体）と TARO のいずれか一方だけでは実現できないような取り組みを共同で実施することで、伝統芸能文化に新しい波を起こすことを目指しました。

今年度は4件の応募があり、審査を経て1件を採択し、現在進行中です。平成30年度に採択した3件のうち、継続中であった1件は今年度事業を完了しました。令和元年度に採択した3件については、1件が完了、残り2件は新型コロナウイルス感染症の影響を受け、次年度以降の完了を目指しています。

1. 目的・特徴

伝統芸能に用いられる楽器・用具用品の復元や、伝統芸能文化を現代に適合した形で活性化させようとする取組を、伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィスと共同で実施しました。

2. 募集する事業

- ア 伝統芸能文化の保存、継承、普及、活用のために必要な取組
- イ 継承に関して緊急性・必要性が高く、関係機関の協力が必要な取組

3. 対象者

研究者及びコーディネーター、実演家、職人、地域の文化を保存する方々など

4. 伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィスが負担する金額上限

1件当たり 100万円/年

5. 募集期間

2020年2月27日(木)～5月29日(金)

— 平成 30 年度 伝統芸能文化復元・活性化プログラム採択事業

柳川三味線のための胴皮新素材開発

申請者：林美恵子（柳川三味線）



柳川三味線の胴皮に用いられる猫皮が入手困難であるため、皮の代替品となりうる和紙を開発しました。胴への貼り方の工夫や、実演家による試演のフィードバック等を重ねて、演奏会に耐えうる精度に高めました。今後も改良を続けていく予定です。

● 第46回 林美恵子と門下による地歌箏曲演奏会

2019年9月8日、京都府立府民ホールアルティにて、改良中の和紙による胴皮を張った三味線での演奏を披露しました。



● 柳川三味線・和紙胴「響」お披露目会

試作と改良を経た和紙胴「響」を張った三味線による演奏と音響スペクトル分析の結果報告を行いました。また、猫皮と「響」の聴き比べのアンケートを行い、「聴き心地」の観点から成果を評価しました。

日時：2021年2月7日（日）15:00-16:30

会場：京都芸術センター 講堂

出演：林美恵子、林美音子

司会：井口はる菜

ゲスト：津崎実（京都市立芸術大学音楽学部教授）



● 京の音、和のイノベーション — 音響心理学で迫る和紙柳川三味線の可能性

本プロジェクトの成果の評価の一例として、音響心理学者の津崎実さんが、人間が感じる音色とは何であるのかについて音響心理学的なアプローチから解説しました。

日時：2021年2月21日（日）13:30-15:00

出演：津崎実（京都市立芸術大学音楽学部教授）

林美恵子

林美音子

主催：京都市立芸術大学

協賛：日本音響学会

協力：伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス



YouTubeでライブ配信のアーカイブを公開しています。

令和元年度に完了した事業

上鳥羽の芸能六斎の復活を目指して— 祇園囃子の創作

申請者：上鳥羽橋上鉦講中（代表：熊田茂男）

ゴッタンカミトボシカミカネコウジウの製造技法および基礎資料のアーカイブと交流ネットワークの創出

申請者：ゴッタンプロジェクト（代表：橋口晃一、黒坂周吾）

令和元年度 伝統芸能文化復元・活性化共同プログラム採択事業

十津川盆踊りの伝承・保存・活用発信

申請者：十津川盆踊り実行委員会（実行委員長 佐古金一、事務局 土井麻利江）



国・村の文化財指定有無に関わらず、各大字で異なる特色を持つ十津川盆踊りの現状調査、演目の復元、ネットワークの構築に取り組み、それに応じた伝承・保存方法を提案します。伝統芸能を地域振興にも活かす方法を模索し、プロジェクトの過程と成果を情報発信します。

● タウンミーティング

各字の盆踊り保存会はそれぞれ独自で活動を行ってき
ていましたが、各保存会代表者が一同に介して情報を
共有する機会を設けます。これまでに3回のタウン
ミーティングを行いました。



第1回

日時：2019年8月7日

会場：高森の郷

参加団体（字）：谷瀬盆踊り保存会、風屋踊り保存会、武蔵大踊り保存会、小原大踊り保存会、
平谷餅つき踊り保存会、出谷踊り保存会、西川大踊り保存会、神納川、湯之原、折立

第2回

日時：2019年11月16日

会場：風屋公会堂

参加団体（字）：谷瀬盆踊り保存会、風屋踊り保存会、武蔵大踊り保存会、小原大踊り保存会、
平谷餅つき踊り保存会、出谷踊り保存会、西川大踊り保存会、神納川、湯之原、折立

第3回

日時：2020年7月18日

会場：十津川村役場

参加団体（字）：風屋踊り保存会、武蔵大踊り保存会、小原大踊り保存会、平谷餅つき踊り保存会、
出谷踊り保存会、西川大踊り保存会、神納川、湯之原、折立

● ウェブサイト



十津川の10の盆踊り団体の活動内容やその担い手の紹介、地域の特色、歴史、魅力など、
十津川の盆踊りに関する情報を総合したウェブサイトを作成します。

● 今後の予定

長く途絶えていた「十三四五」という大踊りを復興させ、その復元過程を記録します。
「武蔵の大踊り」でも披露する予定です。

また、十津川の10の盆踊りを周知するためのパンフレットも制作中です。

新内節の発信と保存プロジェクト

申請者：新内節の発信と保存プロジェクト（代表：新内志賀）



現在、新内節には、東京を拠点に10以上の流派が存在しています。稀曲を含めた楽曲の採譜とデジタルアーカイブ化を行い、新内節の復興に向けて流派間のネットワークを構築することを試みました。これらによって、京都の浄瑠璃から派生した新内節の活性化を図りました。

● 連続講座「新内節を語る」（聞き手：新内志賀、細野桜子）

新内節各流派から若手演奏家を招き、一般を対象に、演奏だけでなく各回のテーマに沿って鼎談を行い、新内節の芸態や魅力などについて一般に周知するとともに、新内節の現状と今後についての意見を交換しました。なお、演奏も含めた全パートの動画は、YouTubeの「新内節の発信と保存プロジェクト」チャンネルで配信しています。



「新内節の発信と保存プロジェクト」
ウェブサイト



YouTube
「新内節の発信と保存プロジェクト」
チャンネル

第1回「我が師を語る」

日時：2020年1月25日（土）15:00～16:30

会場：京都芸術センター 和室「明倫」

講師：鶴賀伊勢吉

第2回「創作を語る」

日時：2月11日（火・祝）15:00～17:00

会場：京都芸術センター 大広間

講師：岡本宮之助

ゲスト：細川周平

第3回「女流を語る」

時間：10月18日（日）14:00～15:30

（当初は3月11日（水）に実施予定だったが、

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため上記日時に変更）

場所：京都芸術センター 大広間

講師：富士松菊子



● 「新内節を語る」講話録

連続講座「新内節を語る」の鼎談を活字化し、関係者のみならず一般にも配布しています。



● 演奏会&トーク「新内節を語る特別編」

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため高瀬川夏祭りが中止となったため、それに伴い「新内節を語る特別編」（ヒューリックホール京都）も一般公開を中止しました。ただし、同様の内容を撮影して、YouTubeチャンネル「新内節の発信と保存プロジェクト」で動画を配信中です。



<1部> 御祝儀曲

「子宝三番叟」

浄瑠璃 新内志賀

三味線 新内志賀桜 上調子 新内志賀日向

<2部> 端物と段物

「蘭蝶」

浄瑠璃 鶴賀若狭掾

三味線 鶴賀伊勢吉 上調子 新内志賀桜

「一谷嫩軍記」

浄瑠璃 鶴賀若狭掾

三味線 鶴賀伊勢吉

<3部> トークコーナー

● 音源と楽譜のアーカイブ化

新内節の楽曲について、現在演奏されなくなったものも含めて音源と楽譜のアーカイブ化を行いました。これまでに古典曲と新曲を合わせて45曲のアーカイブを作成しましたが、一般公開については共同実施者である研進派以外の流派の知的財産の侵害になるおそれがあるため、権利関係について確認中です。研進派のウェブサイトでは楽曲名・作曲者・作曲年代のリストだけを公開しています。志賀大掾が作成した楽譜については、現在、研進派のInstagram上で楽曲解説とともに表紙の画像を公開していますが、今後随時更新していく予定です。



新素材による鉦すりの試作と生産業者の探索

申請者：祇園祭囃子方連絡会（代表：木村幾次郎）



祇園祭のお囃子に用いる鉦すりの柄は鯨の髭から作られてきました。近年では鯨の髭が入手困難であるため樹脂製のものも多いですが、耐久性等に課題があるため、既存品よりも「しなり」の良い新素材による柄の開発を目指しています。

● 現在の進捗と今後の予定

現行品よりも鯨の髭に物性が近い樹脂の柄を開発し、それに鹿角の頭を取り付けた試作品は既に完成しています。ただし、感染症の影響により稽古を実施することが見送られているために、多くの演奏者に試奏してもらうことができていません。次年度の祇園祭で使用することを検討しています。

令和2年度 伝統芸能文化復元・活性化プログラム採択事業

見島のカセドリ藁蓑製作技術の確保計画

申請者：加勢鳥保存会（代表：武藤隆信）



見島のカセドリで使用する藁蓑は、経年による劣化が目立ちますが、保存会に藁蓑を製作できる技術がなく、また他地域にも製作できる技術者が見つけられていない状況でした。そこで、各地の藁蓑に係る団体や機関をリサーチし、藁蓑を製作できる技術者を探し、その技術者から加勢鳥保存会のメンバーに製作技術を伝承してもらいます。また、その過程を記録保存し、公開することで、将来にわたり継続して藁蓑の製作技術が伝承される体制を構築し、全国のモデルとなることを目指します。

※ 見島のカセドリ：佐賀市蓮池町の見島地区で小正月に行なわれる行事。平成30年に「来訪神：仮面・仮装の神々」のひとつとしてユネスコ無形文化遺産に登録された。

● 現在の進捗と今後の予定

東北出身で関東在住の藁蓑工作職人に打診し、カセドリの藁蓑をもとにしたサンプルを作成してもらいました。それを踏まえて保存会が今後製作していきたい藁蓑のイメージを職人との間で共有し、次年度、保存会メンバーが講習を受けに行く予定です。



c 伝統芸能文化の創生のためのシンポジウム&公演

シンポジウム & 公演

一 「芸能と疫病」

日時 | 2021年2月6日(土) 13:30 開場、14:00 開始、17:30 終了
会場 | 京都芸術センター 講堂

第一部 シンポジウム

寺田詩麻 (龍谷大学文学部准教授)

中尾薫 (大阪大学大学院文学研究科准教授)

中川眞 (大阪市立大学特任教授)

ファシリテーター: 竹内有一 (京都市立芸術大学教授)

第二部 実演

能楽・素謡「神歌」

出演: 橋本雅夫、橋本充基、橋本光史、深野貴彦、宮本茂樹

京舞「令和三番叟」

出演: 井上安寿子

解説&展示: やすらい花

協力: 今宮やすらい会、福持昌之 (京都市文化財保護課)

来場者数: 53名



民俗芸能と古典芸能の研究者による「疫病と芸能」をテーマとした第一部シンポジウムと、京都に縁のある実演家や団体による第二部実演を通じて、新型コロナウイルスの退散を祈願しました。

第一部シンポジウムでは、日本の芸能はこれまでどのように疫病に立ち向かってきたのかというテーマで、古典芸能、民俗芸能の研究者3名による発表とディスカッションを行いました。

最初の寺田詩麻さんによる発表「疫病と劇場—コレラと流行性感冒—」では、明治10年代(1880年代)のコレラの流行と、大正7~10年(1918~20)のインフルエンザ(スペイン風邪)流行の際の劇場(歌舞伎)の対応について、資料に基づいてお話いただきました。コレラは明治10年代に数回にわたって流行しましたが、関西においては明治12年(1879)と19年(1886)の流行が甚大な被害をもたらしました。明治19年に大阪府と京都府では、それぞれ6月から11月、5月から10月まで、劇場の興行を「一切停止」せよという布令が出されました。この興行停止による経済的影響が深刻化していくと段階的に条件付きで興行が許可されるようにもなりましたが、芸人や役者たちは出稼ぎに出たり、廃業したり、負債の返済ができずに自ら死を選ぶ劇場主なども現れてくるなど、業界に大きな傷痕を残したのだそうです。その一方で、大正7~10年のスペイン風邪流行の際は、日本では劇場や映画館の閉鎖は行われなかったのだと言います。スペイン風邪で死亡した歌舞伎俳優や劇場関係者がいたり、観客に対する注意喚起が行われたりはしましたが、興行そのものは中止にはなりません。コレラとスペイン風邪に対するこうした対応の違いは症状の激烈さの違いによるものだと考えられますが、スペイン風邪の場合は劇場興行や日常生活上の催しも注意のうえ行われていたのだと寺田さんは言います。スペイン風邪は感染力や致死率の点から新型コ

ロナウイルスと比較されることもありますが、当時、どうしてもそのようなことが可能だったのか、ということについては、まだ答えを見つけ出せていないのだとして発表が締めくくられました。

次の発表者の中尾薫さんは、現在の能楽業界における感染症対策の報告の後に、「能楽と疫病」についていくつかの観点を紹介しました。そもそも疫病は、古来より霊的な力によるものと考えられてきたのであり、病気の「伝染」について明確に語られるようになったのは江戸時代になってからです。それ以前は疫神や疫鬼によって疫病がもたらされると考えられていたために、芸能は疫神をなだめ祀ることや予防と結びついていました。一つ目の観点としては、古代中国の疫鬼退治の儀式である「儺祭」(「儺」は中国語で「ノオ」と発音)に能の源流がある可能性があるという説があります。それは、日本の追儺式には猿楽の呪師が関わっていたという説とも関係しています。次に、能の演目の中には疫病が明確に描かれたことが全くと言ってよいほどないのだと言います。ただし、応永28年(1421)の疫病流行の際に、飢饉により猿楽の奉納を延期にしたために災いが起こったのではないかと言われたように、猿楽には祝禱としての役割があったのは事実です。江戸時代には、將軍等の疱瘡の平癒祈願祝賀として能が上演されたという記録もあります。さらには、明治期のコレラ(ただし、当時は屋外上演。屋内能楽堂の芝能楽堂が建設されたのは明治14年)や、大正期のスペイン風邪の流行の際にも、いくつかの例外的な事例はあるものの、能の公演が大々的に中止・延期になったという報告もないのだと言います。まとめとして、猿楽は奉納芸としての受容であったので、室町時代頃までは疫病の流行に際してむしろ上演すべきだと考えられていたこと、そして、近代になると上演停止の例はあ

るものの、おそらく劇場構造の違いや、能会自体が不特定多数の客を入れるものではなかったという興行形態の違いなどから、現代ほどの影響例を見つけれないのだという報告がなされました。

3人目の中川眞さんの「民俗芸能のラディカリズム」では、中川さんが関わっている十津川の盆踊り（奈良県）や虎舞（岩手県）等を例に、コロナ禍による活動制限下での取り組みが紹介され、京都市が行った「京都の芸術家等の活動状況に関するアンケート」の集計を基に、身体芸術の分野でオンライン展開に対する期待が低いことなどが取り上げられました。その後、コロナ禍の中でこそ祭りを実施する意義を感じるという声があることに焦点が当てられました。例えば、2020年の祇園祭は全面的に中止されたわけではなく、娯楽性や鑑賞性の高い「神賑行事」である山鉾巡行が実施されなかった一方で、神事の部分は粛々と行われたことを中川さんは強調しました。つまり、芸能は観光の需要喚起やその経済効果によってのみ評価されるべきではないのだと言います。もともと芸能は娯楽的な見せ物ではなく、無観客で行われていました。そのように霊的なものとの結びつきや宗教性が根幹にある芸能を、単に「不要不急」な活動として片付けるべきではないのだと主張します。そこで、芸能のもつ「礼拝と葬儀」の意味合いに立ち返ろうとする試みとして、現代音楽作曲家 三輪眞弘さんの『鶏たちのための五芒星』という儀式（パフォー

マンス）を紹介しながら、今こそ芸能本来のあり方を再認識する必要があるのだと締め括りました。

発表時間が超過してしまったため、ディスカッションでは事実確認的な質問や、それぞれの趣旨の確認のみに留まりましたが、異なる芸能分野を広い視点から見直す発表は、芸能の意義を改めて考え直す良いきっかけになりました。

第二部の実演では、会場に設置していたやすい花の風流花笠の解説の後で、天下泰平、国土安穩を祈る言葉が謡われる能楽・素謡「神歌」が、橋本雅夫さんをはじめとした観世流シテ方によって上演され、井上安寿子さんによる京舞「令和三番叟」が最後に花を添えました。「令和三番叟」は、昨年の自粛期間中に藤間流の御宗家である藤間勘十郎さんが新型コロナウイルス感染症流行の終息を祈願して作詞・作曲したものです。昨年の9月に奈良の東大寺で奉納舞が捧げられました。今回はその一部が披露されました。

今回の「疫病と芸能」は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため少ない定員で実施せざるを得ませんでしたが、TAROのYouTubeチャンネルで動画配信しています。



TAROのYoutubeチャンネル



d 市民向け講座

YouTube 能楽講座

—「高砂の思い出」(全10回)—

能「高砂」に関する全10回の講座動画「高砂の思い出」をYouTubeのTAROチャンネルで配信開始しました。動画内容は、謡本を見ながら「高砂」を謡うのに必要な知識や、能の歴史等のレクチャーが主ですが、ドラマ仕立てになっているのが特色です。「高砂」の謡本を持って川辺に倒れていた記憶喪失の女性。そこに現れた能楽師マツノが彼女のために「高砂」の講座をしながら絆を深めていきます。この女性やマツノの正体が明らかになっていくドラマを楽しみながら、能楽についての知識が得られるような仕組みになっています。

主演

能楽師の松野 松野浩行

記憶喪失の女 延命聡子

小鼓 曾和鼓堂

映像撮影・編集 石原毅 (mikumo)

協力 ゲストハウス錆屋、宮本茂樹、萩書房 II



e 新型コロナウイルス感染症の影響下における伝統芸能の状況調査

— アンケート

「京都市の芸術家等の活動状況に関するアンケート」（第1回 2020年5月7日～20日、第2回 2021年1月15日～29日）*の中から、文化芸術諸分野と比較した古典芸能の特徴的な傾向を紹介いたします。以下のグラフの「伝統芸能・その他芸能」が古典芸能分野を表しています（雅楽、能楽、文楽、歌舞伎、組踊、日本舞踊、講談、落語、浪曲、漫才・漫談、その他の芸能）。

*「京都市の芸術家等の活動状況に関するアンケート」
 ウェブページ → 第1回  第2回 

表1～4は第1回アンケートからの抜粋です。それぞれの表現分野を比較してみると、「伝統芸能・その他芸能」は生業・専業の割合が75.0%で他に突出して高いことがわかります(表1)。また、感染症によって公演出演による収入が減ったのは他分野と同様ですが、弟子や生徒からの月謝、授業料が主な収入源であることも特徴的です(表2)。公演中止・延期と稽古が実施できないことが重なり、「伝統芸能・その他芸能」の損失の平均額が高額グループに属する結果になったと思われます(表3)。以上の2つの主な収入源が断たれることにより、表4の「表現分野別の困っていること」では、「伝統芸能・その他芸能」は「生計が立てられない」の項目で最も高い数値を示しており、67.9%が生活に切実な不安を感じていると回答しています。

表1 表現分野別の生業/非生業と専業/兼業〈8分野〉



表2 表現分野別の受け取る予定だった収入元〈8分野〉(複数回答)

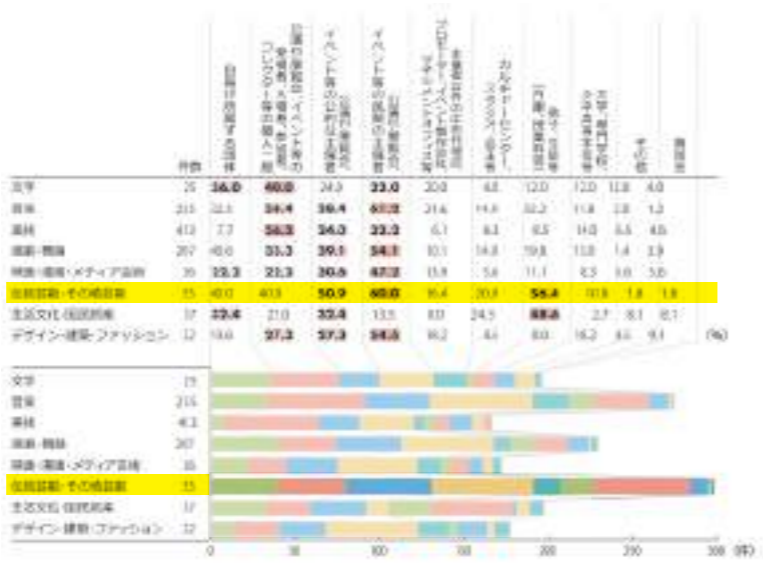


表5、6は、第2回アンケートの結果です。表5は、2019年1月～12月に比べて2020年1月～12月の収入がどれだけ減ったのかを示したものです。収入損失額が「100万円以上」と回答した者が50%を越えている分野は4つあります。その中でも「伝統芸能・その他芸能」は最も高い割合を示しています。2020年の生活費の確保が困難になった時期に比べて2021年1月現在で改善したかという設問に対する回答を示したものが表6です。「改善していない」の回答が7割を越えているのは5つの分野においてであり、「伝統芸能・その他芸能」はその内の一つです。

表3 表現分野別の収入損失

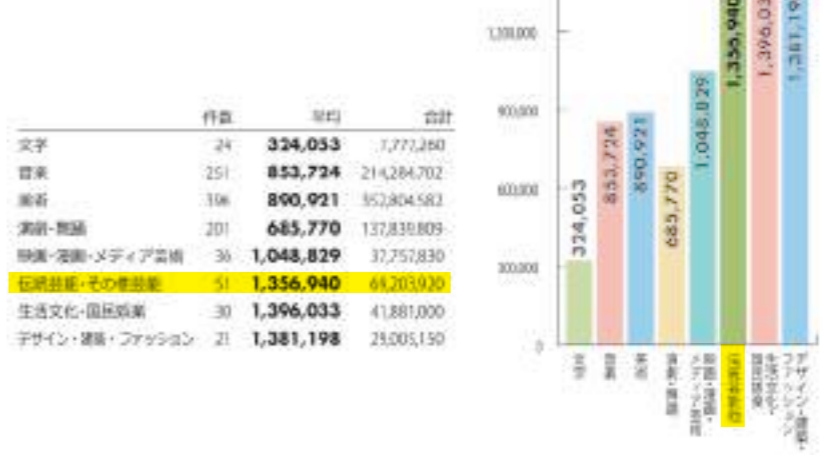


表4 表現分野別の困っていること〈8分野〉(複数回答)

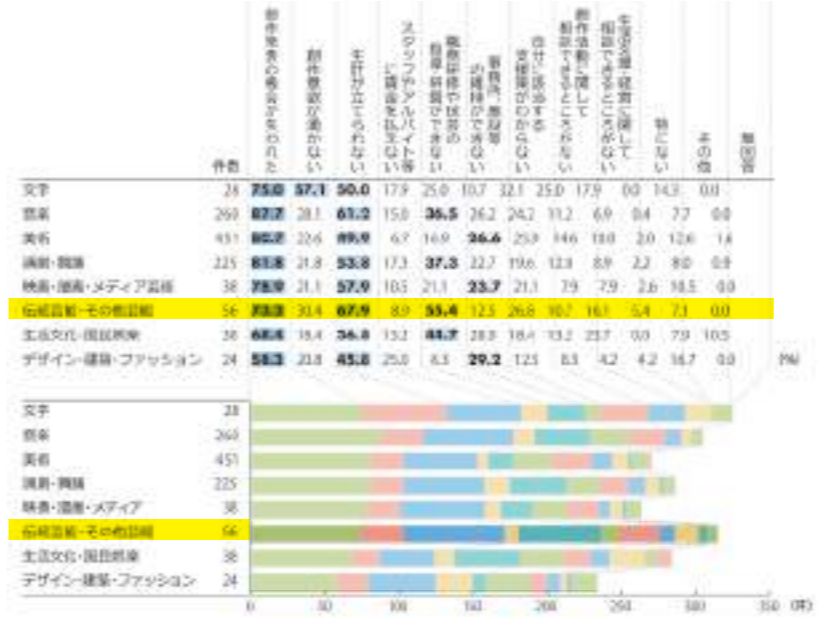


表5 2020年の収入損失の金額規模(2019年比)

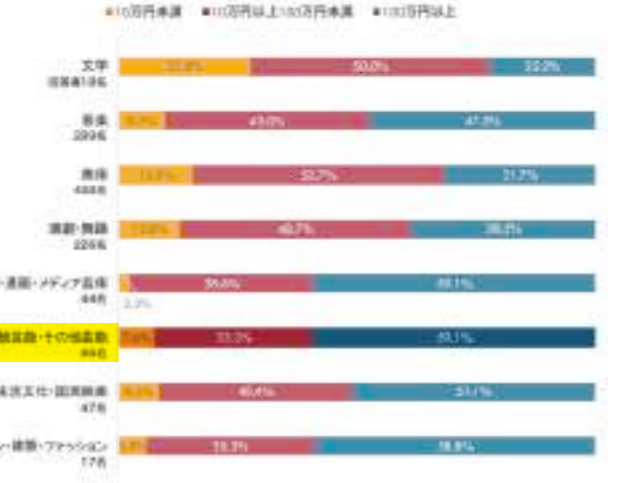
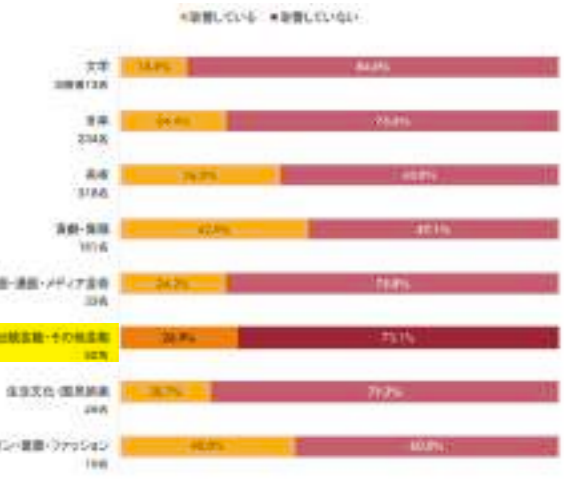


表6 生活費の確保が困難になった時期に比べて収入状況は改善しているか(2021年1月時点)



— 新型コロナウイルス感染症の古典芸能への影響についてのヒアリング

TARO は、邦楽、舞踊、能楽、歌舞伎、楽器・道具の分野における若手から中堅の関係者（京都を中心とした9つの団体及び個人）を対象に、2021年の1-3月にかけてヒアリングを実施しました。2020年春（東京は3月、京都は4月）の緊急事態宣言の発出から現在に至るまでの状況の推移、業界全体の傾向、個人的な取り組み等を把握することを目的としました。ヒアリング結果の一部を抜粋して以下に紹介します。

邦楽

- 2020年3月以降の演奏会は全てキャンセルになった。それから約1年間は演奏会を開催せずに、2021年2月に久しぶりに舞台上がった時にはものすごく緊張した。もちろん普段から練習はしているが、大勢の前で演奏することはなかったため、同じ舞台上上がった演奏者と音程を合わせたりすることなど、それまでは意識せずにやっていたことについてとても注意して行うようになっていたことに自分でも驚いた。緊張感のない演奏はダメだが、今回の緊張感はいくらも感じることがないくらいだった。

- 弟子たちに稽古をつけることができず、2020年12月から2021年1月は全く稽古をしなかった。この2ヶ月の休みの後に稽古を再開してみると、技術が著しく落ちていたのがすぐにわかった。落ちた分の技術を取り戻すには2ヶ月くらいでは絶対に足りない。近場の弟子から稽古を再開しているが、全員ができる状況にはまだなっていない。

- オンラインで稽古をするのは難しい。いわば口伝の世界であるため、対面でやらなければ伝わらない。対面での稽古をする際には、量2つ分の距離を開けて行っている。これは弟子への配慮もそうであるが、私自身がコロナにかかったらその影響が甚大になるためにそうしている。演奏会についても、必要な対策を行った上で生の演奏をする様にしている。オンラインの公演は考えていない。

- 最近やっていることとして、メディアで演奏する機会がある際には、あまり演奏されていない曲をやるようにしている。楽譜が存在しないような古典を残していくためにそうしている。そうした曲を聞きたがる専門家も多い。

舞踊

- 花街でクラスターが発生したことが大々的にメディアで報じられたので、京都の日本舞踊はほとんど公演をすることができない。非常に難しい舵取りが強いられている。

- 個々の流派でコロナ対応をするのが難しいので、日本舞踊協会が中心になって全体を盛り上げていこうと尽力している。特に動画配信に積極的でYouTubeチャンネルも盛んである。舞踊は関わる人数が多い芸能であり、経済的に厳しい状況であるが、協会を中心に皆で協力し合う姿勢が強まってきたのはいいことだと思う。

能楽

- 2020年3月から依頼公演は全てキャンセルになったが、2020年9月以降、自主公演をいくつか行っている。しかし、観客数の制限があるため赤字になってしまう。

- 養成会で研究公演をしたら、とても多くの方が来られた。

- オンライン公演も文化庁の助成金で行っている。生の舞台、ライブ配信、オンデマンド配信を組み合わせ、料金に差をつけたり、特典映像をつけたりしているが、配信期間中にどこまで売れるのかはわからない。こうした経験から、メディアでの公開の際の権利関係がスムーズに調整できるようになった。

- 能の公演は、席数を半数にしたり、舞台上でも地謡は舞台用マスクを着けたりするなど感染対策を講じているが、今でも学校関連のワークショップや授業などは全て中止のままである。

- 1回目の緊急事態宣言の時には素人さんへの稽古はやっていなかったが、やがてオンラインで実施するようになった。ただ、リモート稽古は配信速度が環境によって変わってくるので、一人稽古ならいいが、複数人へ向けた稽古には向いていない。高齢の素人さんは、まだ稽古を休まれている方が多い。教える能楽師も、抱えている素人さんも比較的若い場合は、夏頃に稽古を再開できたが、高齢の能楽師は秋頃になってから。素人さんの発表会は延期中。発表会は他のシテ方やワキ方、囃子方などを雇って行うので、素人さんの発表会がなくなることで経済的に打撃を受けている。仕事としては、能の定例会か素人さんへの稽古というシンプルな姿になった。学校での能のワークショップなどはすべて休止しているので、なんとかして復活してほしい。

- 能楽界全体としては、一般社団法人観世会や公益社団法人能楽協会は動画配信を行なうなどの動きがあるが、特に京都の能楽協会が積極的な動きはない。家によっては動画配信を盛んにされている。

- コロナ禍での対応の方向性が能楽師の間で二つに分かれている。一つは「既存の形態が実施できるようになるまで待つ」「焦って変わるべきではない」という考え。もう一つは「能楽を発信するための新たなアイデアが必要、変わっていかねばいけない」という考えである。おおそ前者が約8割で、後者が残りの2割。前者は補助金申請もあまり行っておらず、公演を延期し、その分の時間を稽古に充てている。後者は、急に積極的な動きをし始め、動画配信を行ったり、クラウドファンディングを行ったり、他分野とコラボレーションをしたり、忙しく動いている。

歌舞伎 立方

- 2020年3月から公演の中止や延期が始まり、6月から公演が再開するようになった。松竹芸能がコロナ対策をしっかりと考えているので、自分で悩まずにいられる。公演を今までの二部制から三部制にし、上演時間が短縮された。出演者が出入りする時間もかなり細かく厳格に設定されている。そのため、本番直前でないと会場に入れず、稽古を別の場所でしないといけない。とはいえ、はっきりと方針を打ち出してくれているのはありがたい。

- オンラインでの稽古や打ち合わせ、動画配信とかなり忙しい日々を行っている。オンラインだと分刻みのスケジュールになるので、もしかしたらコロナ以前より忙しくなったかもしれない。

- 今は、直接収益に結びつかなくても、お客さんが少しでも楽しめるような機会を提供すると同時に若手が経験を積めるような舞台を用意することが大事だと思っている。

歌舞伎 鳴物

- 興行主毎に特定の人物が音楽の演奏者の構成を考えるが、東京公演の場合は、関西の人に声がかかることがなくなった。関西公演の場合も、バランスを考えてできるだけバラけるように依頼がなされているようだ。

- 松竹芸能は徹底したコロナ対策を行っており、楽屋も5-7人毎の小分けの部屋になった。

- 個人的に他のメンバーに声をかけて会を開くのは、赤字のリスクが高いためやらないことにしている。また、楽器・楽譜整理や動画配信など色々やりたいことや構想があったが、いざ行動に移そうとするとどうしたらいいのかかわからず、結局何もしていない。

- 公演で収入を得るのが難しくなった時に反省したのは、もっと弟子集めをしておくべきだったということ。そうすると固定収入を得ることができる。

歌舞伎 裏方

- 役者だけでなく、小道具係、案内スタッフなども、三部それぞれ別の人に入れ替えている。

- 小道具に関しては、複数人で共有するものは消毒を徹底し、道具スタッフが道具を出すのではなく役者が管理するなど、接触を極力減らす形をとっている。

楽器職人 及び 舞台道具 業者

- 花街の踊りが収入の大きなウエイトを占めており、公演がないと楽器調整の依頼もなくなるので、本当に厳しい一年だった。

- 3月くらいから公演が中止、延期、休演になり始めたので、会社としては休業していた。雇用調整助成金がなかったら、会社は厳しい状況を迎えていただろう。

- 東京の劇場では、8月公演から役者や裏方スタッフにPCR検査が行われている。

- 今、問題なのは、後進の人材育成である。2020年4月に入社してきたスタッフはすぐに休業になったため何も経験を積めていない。オンラインで研修を行ったりはしているが本番の経験を積むことがなによりも重要なので、後進の育成ができない。

f 相談窓口

TARO では、伝統芸能文化に係る相談窓口を設置しています。芸能の演者、彼らを支える人、芸能に関心のある人など、どなたからでも相談を受け付けています。また、それをきっかけに様々な支援活動を展開しています。

質問・相談者	連絡方法	質問・質問内容
アーティスト ----- 14	電話 ----- 50	TARO の活動について ----- 6
実演家（古典芸能）----- 99	メール ----- 112	取材依頼 ----- 12
実演家（民俗芸能）----- 30	対面 ----- 64	復元・活性化共同プログラムに関する質問 ----- 52
職人 ----- 11	オンライン ----- 6	新型コロナウイルス感染症に関わる相談
研究者 ----- 1	(件)	企画・運営 ----- 66
一般 ----- 14	地域	支援金・補助金 ----- 74
学校 ----- 3		その他 ----- 22
企業 ----- 2	京都府内 ----149	(件)
団体・公共施設 ----- 29	京都府外 ----- 57	(2020年4月1日から2021年2月13日現在) 件数 232件
市町村（地方自治体）--- 16	その他 ----- 26	
メディア・プレス ----- 13	(件)	

質問・相談例

この芸能の業界全体で協力し合って困難を乗り越えていこうとするようなネットワークがないので、どうしたらよいか。
(古典芸能実演家)

新型コロナウイルス感染症対策のガイドラインの作成の仕方を教えてほしい。
(公共施設)

舞台公演がなくなり、道具や楽器製作にも影響がある。京都市や国の方策を教えてほしい。
(職人)

東京オリンピックで伝統芸能のパフォーマンスを検討している。相談に乗ってほしい。
(市町村)

過去に実施された伝統芸能文化復元・活性化共同プログラムに関心がある。報告書などがあれば閲覧したい。
(一般)

新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、公演と稽古がほぼ中止になってしまい、無収入なので給付金の情報を知りたい。また、企画の相談にも乗ってほしい。
(古典芸能実演家)

京都市文化芸術活動緊急奨励金の申請では、TARO に書き方を一から教えてもらった。申請書の国語レベルからのチェックから、報告の提出まで相談し続けました。常に親身に対応していただき、ありがとうございました。
(職人)



感染症拡大による舞台公演の自粛の状況があと半年続くと、きっと舞台に立てなくなってしまうと思う。舞台に立つ事ができないと、確実に技量が落ちる。今後、舞台芸術はどうなっていくのか。
(古典芸能実演家)

劇場や文化行政の動向を教えてほしい。感染症の状況下で、今後どういった対応をしていくのか。
(公共施設職員)

恥ずかしながら、補助金の申請をするのがはじめてなので、書類の書き方をチェックしてほしい。
(古典芸能実演家および民俗芸能実演家)

集まることができない状況で、地域の祭りも開催できず、何も楽しみがない。高齢者や子どもが主体となる芸能において、どのように再開していいのかわからない。
(民俗芸能実演家)

地域の年中行事で美術工芸品を屋外に展示しているが、レプリカを作成すれば雨天下でも実施できるし、活動の幅が広がっていくはずだと考えている。あてはまる支援があれば教えてほしい。
(市町村)

舞台公演での新型コロナウイルス感染症対策として、舞台上での出演者同士のソーシャルディスタンスの取り方や楽屋での対策などを教えてほしい。
(公共施設)

公演のライブ配信を行うことを考えているので、ビデオカメラマンを紹介してほしい。また、配信サイトも何がいいか教えてほしい。
(民俗芸能実演家)

私は立方ではないので自身で企画を立てることができない。企画に対する補助金以外の支援の募集があれば知らせてほしい。自分が舞台を続けていくために、まず何から始めたらいいのかを相談したい。
(古典芸能実演家)

伝統芸能文化復元・活性化共同プログラムは、TARO も共同で事業実施していくのか？新しい形で素晴らしいと思うが、財源は京都市だけなのか。
(一般)

自営業のような形で活動しているため、一人じっと自粛し続けていた。思った以上に状況が良くならないので、支援金の申請を考えている。TARO のように気軽に相談に応じてくれる機関があると心強い。書類も細かく指導していただき、感謝している。
(古典芸能実演家)

業界内で今後について話し合うと、状況が落ち着くまで待とうとする考えの者と、新たな動きを開始することが必要だと考える者がいる。私は後者だが、議論が平行線をたどらないようにするためには、他分野の人も交えて話し合う必要があると感じている。
(古典芸能実演家)

私は職人なので事業者に対する支援ばかりを見ていたが、TARO から舞台の道具を作っているのであれば、文化芸術に対する支援の方も検討してはどうかと言われ、申請することにした。文化芸術の枠組みに入れて考えてくれたのが嬉しかった。
(職人)

g 受託・協力・連携事業

○ 協力事業

一 京都市自治記念式典 オープニングセレモニー

オープニングセレモニーの「邦楽」の企画制作として協力。

日時：2020年10月15日（木）10:00-11:30

会場：ロームシアター京都 メインホール

内容：いけばなと邦楽の共演「テーマ：秋麗」

出演：遠州正風宗家 七世貞松齋、芦田一馬、杵屋勝九郎、杵屋勝進良

主催：京都市

○ 新型コロナウイルス感染症の影響により中止になった事業

一 地域の小中学校との連携プログラム

【企画制作】

中学生の能楽大連吟～未来～

日時：2020年11月23日（月・祝）

会場：ロームシアター京都 サウスホール

9月～11月に京都市内の6つの中学校を複数回訪問し、能「高砂」を稽古し、

11月23日にその成果を、プロの能楽師と共に舞台上で発表します。

※稽古も含め全体が中止となりました。

一 【受託事業】

教文伝統芸能シリーズ「能楽なう」

日時：2020年9月2日（水）18:30 開演

会場：札幌市教育文化会館 大ホール

内容：宝生流能「巻絹 五段神楽」、大蔵流狂言「素襖落」、観世流「葵上 梓之出 空之折」

出演：和久莊太郎、深野貴彦、茂山茂ほか

主催：札幌市教育文化会館

企画制作：伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス

地域の小中学校との連携プログラム、受託・協力事業のいずれにおいても、他数件中止

h ウェブサイト

— <http://www.traditional-arts.org/>



TARO の最新ニュースやイベント情報を掲示しているだけでなく、伝統芸能文化に関する記事や、過去事業の記録を動画と文章で随時投稿しています。ウェブ相談窓口では、伝統芸能文化に関する相談、伝統芸能文化復元・活性化共同プログラムに関する相談、イベントに関するお問い合わせ等を受け付けています。いつでも気軽にアクセスできるウェブサイトが皆さんと繋がる第一歩となります。また、TARO の年度事業報告書や、「伝統芸能文化復元・活性化共同プログラム」の各種発行物、「伝統芸能文化センター」設立に向けた京都市と京都芸術センターの取り組みをまとめた冊子「伝統芸能文化センターの実現を目指して」もダウンロードできます。



i 伝統芸能文化創生プロジェクト推進会議委員より

TARO は、伝統芸能に関する専門家からの意見を仰ぐ機会として伝統芸能文化創生プロジェクト推進会議を設置しています。

伝統芸能文化創生 プロジェクト推進会議委員

久保田裕道（東京文化財研究所 無形文化遺産部 無形民俗文化財研究室長）
小林昌廣（情報科学芸術大学院大学 教授）
竹内有一（京都市立芸術大学 教授）
山口肇（京都市産業技術研究所 産業・文化連携担当課長 研究主幹）

西岡陽子（大阪芸術大学 教授）
広瀬依子（追手門学院大学 国際教養学部 講師）
吉田純子（文化庁 文化財第一課 芸能部門 調査官）
北村信幸（京都市 文化芸術政策監）

○ 京都芸大「常磐津部」からみる伝統芸能の現在

竹内有一（常磐津若音太夫 京都市立芸術大学教授）

私は、京都市立芸術大学の日本伝統音楽研究センターと大学院音楽研究科で専任教員として研究と教育に日々携わっている。2016年、本学に「常磐津部」が発足、その顧問と指導を担当している。実演家としては齢五十を過ぎて未だ「若手」の立場だが、10年ほど前から授業や市民講座で自分なりの工夫で実演ワークショップを取り入れたところ、閉講後も続けたいという希望者が毎回あられ、三味線を弾いてみたい、仕組みや特徴をもっと知りたいという学生・留学生が、私の研究室をしばしば訪れるようになった。

そうした要望に応じるのは実演家・研究者として有意義で楽しい体験だが、時間の制約もあり、より効率的かつ発展的な手法として、クラブ活動（部活）を活用することを学生との雑談のなかで思いつき、顧問として立ち上げに協力するに至った。当初1年間は規定により同好会扱いだったが、翌年から大学公認の部活になった。私以上に学生に寄り添って熱心な指導を無償で続けているのが、私の研究室の共同研究員で実演家の常磐津音花さんと、常磐津部の「お母さん」というべき貴重な存在である。

学生自治会行事への参加も可能になり、2017年4月14日に同会主催新入生歓迎会に生演奏つきで初参加。同月に2回の見学会を実施したところ、20名以上の見学者が訪れ、てんやわんやであった。そのうち約3分の1が新入部員になるという喜ばしい異常事態を迎えた。入部理由を尋ねると、歓迎会の演奏がかっこ良かった、衣装をふくめ演奏の様子が真剣かつ楽しそうだった

から（映画で使われる本物の鬘をかぶった学生も、なぜかいた）、という回答が多く、伝統芸能に興味があったからという人は意外に少なく、その経験者も少なかった。つまり、音楽好き楽器好き、好奇心旺盛な美術学生が新入部員の大半であった。部活名称が、よくある邦楽部・三味線部ではなかったことも、常磐津って何？という不可思議な興味を惹いたようだ。公立芸術大学の学生ならではの感性・感覚にうまく填まったのかもしれない。

美術・音楽、それぞれの学部を持つ本学だが、学生自治会は美校の伝統をひいて美術生のみが運営するため、歓迎会・見学会経由で入部した学生は美術学部生ばかりであった。日頃から音楽が飽和している音楽学部生に対して、気軽に楽器・音楽を楽しめる部活が軽音楽部以外になかった美術学部生の潜在的需要が高かったのだと思われる。軽音楽部と常磐津部を掛け持ちする学生が少なくないことも、この推測を裏付けるだろう。

大量の三味線の調達がままならない中、11月の芸大祭に参加するかどうか、参加するとしたら何を行うか、と方針を決める締切がほどなく迫った。常磐津は歌舞伎の音楽だから歌舞伎をやったらどうかという誰かの提案が投票で通ってしまった。「通ってしまった」と後ろ向きに述べた訳は、歌舞伎や常磐津の本公演をみたことも聞いたこともない学生がほとんどの中、どういう歌舞伎ができあがるのか、私には想像がつかなかったからである。実現の可能性は五分五分であろうと思

われた。しかし大学内の活動だから失敗もよし、経過と経験が肝要だろうと思うことにした。

このような奇想天外、実験的な部活動が展開した背景には、鷲田清一学長（当時）の存在も大きかった。大学のあり方、芸術のあり方を常に真摯に模索しておられる学長の姿は、学生にとっても我々教職員にとっても、一つの鑑であったといえよう。7月には学長室主催ミニコンサート「ムジカジカン」で常磐津部が演奏を披露させていただいた。音楽学部の精鋭が招かれるこのシリーズで、美術学部生が演奏したのは、最初で最後の機会であった。

こうした盛り上がりの中、芸大祭出演に向けて準備が進められていった。芸大祭の舞台は、本来の歌舞伎の真似事ではなく学生たちの作品発表であるという考えから、私の入れ知恵で「芸大 KABUKI」と銘打つことになった。台本も学生が作り、おもに稽古していた常磐津節の古典曲（平将門の遺児の滝夜叉姫が武将光国と対決するまでを描く歌舞伎舞踊曲「将門」（忍夜恋曲者））を、時代観の錯綜する舞踊劇風に再構成した。原作では滝夜叉が京の桜名所を身振りて回想してみせ光国の油断を誘うところを、エヴァンゲリオンの世界に置換し発展させた台本であった。

舞台装置は所定の芸大祭ステージの枠にとどめたが、衣装・小道具類は芸大生ならではの感性を発揮した瀟洒なものになった。稽古に僅かしか参加できなかった者、役者と早替わりで演奏する者もいて、実演家の立場としては、何よりも演奏の仕上がりが気がかりであった。もし師匠・先輩方が聞きにいらしたら、どういう点をどう指導されるだろうか、どういう点にお叱りを受けるだろうか、ということをご自分なりに考えてやってみるしかなかった。

大学生と伝統芸能の関わりについて実体験から一端を紹介してきたが、芸大 KABUKI の詳しい制作過程、延べ数十挺に及ぶ三味線の調達・メンテナンスから稽古までの委細、ふだんの部員たちの活動の様子については述べる紙幅がなくなった。部活動において学生たちに切望すべきことは、伝統芸能そのものを普及させたり技能を向上させたりする意識よりも（もちろん技能向上にも期待以上に取り組んでくれているが）、伝統的なものに対する異文化接触的発見、古くて新しい価値観との遭遇、それらを踏まえ自らの作品制作・研究の可能性を見つめ直す意識に繋げてもらうことである。引き続き、顧問として実演家として、部員たちのサポートを楽しんでいきたいと思う。



2017年11月5日 京都市立芸術大学（西京区大枝沓掛町、芸大祭メインステージ）「芸大 KABUKI 新・忍夜恋曲者」。以後毎年、制作公演（2020年度はコロナ禍で中止）

○ さまざまな上演

小林昌廣（情報科学芸術大学院大学 教授）

コロナ禍になって、もっとも影響を受けたもののひとつは、言うまでもなく劇場だった。寄席、映画館、ミュージカル、ストリップ、大衆演劇、ライブ、それに歌舞伎や能など、およそ「人が集まり鑑賞する」ことが忌避された。理由は明白だ、それが不要不急であり、客席が「密」になるからだ。表現行為に対して不要不急で論じることなど、ほとんどされてこなかっただろう。1989年1月7日、昭和天皇が崩御したときには「自粛」が叫ばれ、しばらくの間劇場は閉鎖されていた。1995年の阪神淡路大震災や2011年の東日本大震災でも劇場は閉鎖されたりしたけれども、それは物理的に上演が不可能だったり、内容的に問題があったりした場合に限られていた。しかも、野田秀樹のNODA-MAPは東京芸術劇場での『南へ』の公演を、3月15日に5日ぶりに再開するという「暴挙」に出た。『南へ』は観測所近くの火山が噴火して大地震に見舞われるシーンが登場するが、その内容はすでに震災以前からできあがっていたものであり、また「音楽や美術や演劇が不自由になった時代がどれだけ人間にとって不幸な時代であったか、それは誰もが知っていることです。劇場で守るココロというのは、人間の営みに欠かせないものです。日常の営みを消してはならないように、劇場の灯も消してはいけない。だから一日でも早く、再開したかった」と上演開始前に野田自身が舞台に登場し、コメントしている。だが、これをいち演出家のワガママと解釈してはならないだろう。実際、公演は31日まで続けられたが、チケット代はすべて義援金へと回され、カーテンコールもなく、暖房も止め、電力不足に配慮するなど、通常の舞台公演とはやはり異なった上演形態で舞台は務められたのである。

もちろん、これは震災時であり、コロナ禍のように個人個人に被害が及ぶかもしれない状況とはちがうだろう。だから、コロナ禍で「上演」をすることを「劇場で守るココロというのは、人間の営みに欠かせないものです。日常の営みを消してはならないように、劇場の灯も消してはいけない」と言い切れるかどうかはむずかしい。

演劇人にとって劇場は日常の空間であり、生きる場所であるだろうが、さて観客の側に立てば、そのような「悠長」なことは言ってもらえないというのが本当のところではないだろうか。上演することそのものが（現に初期のコロナ禍ではライブハウスでのクラスターが顕著であった）、人が集まることそのものが、演者・観客の別なく「危険」なものだったのである。現在は、決して予断は許さないものの、歌舞伎座も劇団四季も、つまりは1000人規模の巨大な劇場も上演を再開しており、じゅうぶんすぎるほどの衛生状態を保持しつつ、観客を招来している。考えてみれば、飛沫の飛ばない空間では、感染の可能性が低いから、こうした大劇場であっても、観客がひとことも口をきかなければ（もちろん、歌舞伎における大向こう＝掛け声は禁止である）、おそらくは感染は防げるだろう。その事実を知り、また実践に移すことが劇場にとっては「賭け」であったと思われる。いまは「たまたま」その賭けに勝っているだけなのかもしれない。

そんな賭けに出る前に歌舞伎役者の松本幸四郎（十代目）は「凶夢歌舞伎」と題して、ネットによる歌舞伎の上演を盛んにおこなった。幸四郎が領袖であり、他の役者はそれよりも下のランクの役者が揃っての上演＝上映となったが、これは画期的であった。シネマ歌舞伎でしか観ることのできなかった演目を鑑賞することができたし、何よりも面白かったのが、たとえば『仮名手本忠臣蔵』の「四段目」では切腹をする判官とかけつける由良之助が幸四郎二役で演じられるのである。こうした演出はまさにこうした動画でなければ実現できない快挙である（可能であれば、吉右衛門の弁慶・富樫・義経で凶夢歌舞伎「勧進帳」を観たいものである）。また、能楽師もさまざまに趣向を凝らしたYouTubeを配信しており、歌舞伎や能楽などの古典芸能のほうが、たくましく「新たな鑑賞法」を提案し続けているのである。TAROも芸能や演芸などの舞台表現においてなんらかの支援ができるものと強く思っている。

○ コロナ禍における伝統芸能文化のゆくえ

北村信幸（京都市文化芸術政策監）

令和2年1月16日、国内で最初の新型コロナウイルス感染症の陽性者が発表された。以来、我々は経験したことのない事態の中で、したがって教科書もない中で手探りを続け1年が過ぎた。

「マスク」、「消毒」、「三密回避」、「黙食」という未知の行動様式が求められ、国民の生活を直撃。飲食業をはじめ多くの産業が経済的打撃に見舞われている。伝統芸能文化をはじめとする文化芸術活動も新たな行動様式とは相いれず、慣れないオンラインに挑戦しつつも途方に暮れる中、「まずは生活が最優先で、文化芸術は不要不急ではないか」と耳を疑うようなことも言われた。（京都市では、心豊かな人生を過ごすためにも文化芸術は必要不可欠という考え方を明確にしている。）

4月に発出された緊急事態宣言により、ロームシアター京都や京都コンサートホール、京都芸術センターなどの市の文化芸術拠点も休館を余儀なくされ、3年越しのリニューアルオープンを控えていた京都市京セラ美術館も開館を延期、文化芸術活動も窮地に追い込まれた。

京都市では、こうした苦境にある文化芸術関係者を支援するため、上限30万円の緊急奨励金制度を創設。申請書類や添付資料を可能な限り簡素にして、合計1,011件を速やかに交付した。この中には、日本舞踊や長唄、能楽など、伝統芸能文化の取組も多くみられ、主としてオンライン配信ではあったが、何らかの支援につながったのではないかと考えている。

4月20日には祇園祭の中心的行事である山鉾巡行と神輿渡御（7月17日、24日）を中止する発表がなされた。貞観年間に疫病退散を願って始まったとされる祇園祭からクラスターが発生しては本末転倒であると。（もちろん関係者の強い思いから、工夫を重ねられ、祭礼の本旨が守られたことは言うまでもない。）

また、子供の成長や地域の安全を願う行事として京都に定着している地藏盆も、（多くは、地藏菩薩の縁日8月24日の前日を中心に行われる）事前の調査では「51%が開催、32%が開催しない」* という状況で、京都

に伝わる地域の民俗行事であり、地域コミュニティにも寄与している地藏盆に大きな影響を及ぼした。（ちなみに京都で地域コミュニティに寄与しているのは、地藏盆と、元の小学校区を単位に行われ町内対抗の形式をとる区民運動会であると筆者は見えており、その区民運動会も大多数が中止された。）

祇園祭と地藏盆では、置かれている状況は少し違うが、共通するのは「三密回避」をはじめとする感染症対策が見通せず、関係者に「自分たちの取組で万一感染症が拡大したら」という心理的不安を抱えていたことである。鉾建てや宵山、巡行での密集をどうすればいいか、数珠回しやおやつ配りで感染しないか、関係者の葛藤は続き、そして、今もなお続いている。（令和3年3月現在）

古典芸能や民俗芸能が、芸能の多様化や担い手・支え手不足、経費の問題、楽器・用具用品の確保などの問題から伝承が危ぶまれている中、コロナ禍によりさらに困難な状況に追い込まれている。中には、コロナ禍を口実に活動を止めようという動きがあるとの残念な話も耳にする。

DX（デジタルトランスフォーメーション）、Society 5.0社会の到来を控えた今こそ、文化の多様性を確かなものにしたい。地域コミュニティの活性化にも寄与する、全国の伝統芸能文化の支援を進めるため、文化庁が移転する京都において、TAROの活動を充実させたいと強く願うところである。

* 前田昌弘「新型コロナウイルス（COVID-19）禍における地藏盆の開催状況—京都市におけるアンケート調査と現地調査を通じて」『少子高齢化社会に対応した子育て支援住環境システムの構築と実装に関する研究』（科学研究費補助金報告書）2021年9月刊行予定。

